

誘惑を受ける 『マルコ1:12〜13』 ⇨タイ4:1〜11、ルカ4:1〜13)

¹それから、「**霊**」はイエスを荒れ野に送り出した。¹³イエスは40日間そこに留まり、サタンから誘惑を受けられた。その間、**野獣**と**一緒**におられたが、**天使**たちが仕えていた。

①、御霊がイエスを荒れ野に送り出す。

②、40日間の意味

③、サタンからの誘惑

④、野獣と天使

1、霊がイエスさまを荒れ野に **追いやった**」という記載 (新解約) もあります。バプテスマの際イエスを 「自分の心に適う者」と祝福された父なる神の御霊が、過酷な荒れ野の試みに放り出されたのです。何故でしょうか？本来神の子であられるイエスは試みに会われる必要はありません。でも一つには、神に対抗しようとする邪悪な勢力が人間を狙っています。その力と戦い人間の為にその力を退けねばなりません。もう一つは、私たちが誘惑に会わずに「下さい」と祈らざるを得ない弱い人間の中に、イエスが共にいて私たちが助ける為に、人間と共に水の中に浸されたのです。私たちが誘惑の中で御霊と共に助け、神様の永遠の救いを得させる為です。実際、キリスト・イエスに合うバプテスマを受けた私たちも、洗礼の後、大抵は戦いが始まるのです。もし全然サタンとの戦いが無い人は、よほど祝福された幸福な人か 多少皮肉な言い方です)、サタンの誘惑に陥って、イエスに近づきたいという切なる願いを忘れてしまった人間なのです。と言う事は、バプテスマは、目的地ではない 「大入り口」と言うことです。目的地は、**救い主イエス**」の心が自分の心となること。だから御霊がイエスを追いやったように、私たちも洗礼を受けた後、色々な試みに会わねばならぬのです。そこは荒れ野です。信頼すべき人は誰もおりません。それほど厳しいと言うことで、現実にはイエスが居られ、信仰の先達を大抵見つけ出すことが出来る)。そこで唯ひとりで、イエスと直接の交わりをすることによって、それが祈りです)、イエス様への信頼は強くなり、神の愛と平和が与えられ、神に **神の子**イエスを通して) **すべてを委ねる**」事を知ります。

2、**40日**とか**40年の意味** モーセに率いられたエジプト脱出のイスラエル民族の放浪(40日40夜 エリアはホレブ山に着くまで40日40夜かかった) クアの洪水も40日40夜激しい雨が降り続いた)、と言った表現が聖書の中にはよく出てきます。40と言う数字は 適当な期間と言う(ヘブル語の常套句だ、だから重大に受け取る必要はない)とパークレーは云っています。しかしこの数字が用いられる時は、何か重大な事態が起きる時だと思われれます。復活のイエスが弟子達の前に現れて下さったのは40日間と記載。

3、サタンからの誘惑

サタンはイエスに云おうとしていた **力と権力と流血によって世界を手に入れよ**」と。神は、イエスにおいて言おうとしておられた。わたしの愛を人々に与えよ。命をかけて人々を愛せよ。十字架の上に死ぬとも、この敗れることのない愛で人々に仕えよ。サタンは云う。

暴力の独裁政治を始めなさい」。神はイエスに「愛の支配を始めなさい」と言われた（ペークレー）。このサタンとの戦いは**マタイによる福音書**4:1〜10に詳しく書いてあります。イエスの空腹に対して、神の子なら、石をパンに変えてみよ」と言う問題。パンのみで生きるのではなく、神の言葉によって生きる」^{【神命記8:1〜3】}とお答えになった。これは人間の経済的欲求に対する態度です。経済的な欲望の達成が第一ではない、と言うことです。二番目、高い神殿の屋根の上に立たせて、飛び降りてみよ、神の子なら、神が守って民衆も信じるだろう」と言うのです。イエスは「主を試してはならない」とお答えになる。主を試みる行為は、人間の側の欲求を神が満たすかどうかという行動であり、信仰は自己が無くなって神の真実だけを根拠として行動することで、全く別物です。主を試してはならない」^{【神命記6:16】}は、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、自己を完全に放棄して「あなたの神、主を愛しなさい」^{【神命記6:5】}のすぐ後におかれていて、主をためてはならない」はその裏を示しているのです。最後のサタンの言葉はいよいよ支配の問題です。サタンは云います「私を拝むなら、世界のすべてを与える」と。イエスは「退けサタン、あなたを神である主を拝み、唯主に仕えよ」と書いてある^{【神命記6:13】}。この3つの誘惑は皆、あなたには、私の他に神があつてはならない」と言う第一戒に関する戦いです。市川喜一氏著「マタイによるメシア・イエスの物語」より）

4、野獣と天使 何だか映画（美女と野獣）のタイトルのようですね。野獣の解釈は人によって違っていますが『一つは人間に害を為す獣』と言う解釈。荒れ野では人間すら野獣になる、例えば戦争という荒れ野において。一つは荒れ野にイエスが居られる場面は、**終末の場**を表し、その時の野獣は天使と同じ終末の姿である。おおかみは小羊と共にやどり・・・**乳離れの子は手をまむしの穴に入れる**・・・**主を知る知識が地に満ちるからである**^{【ネサヤ11:6〜9】}。これは終末的平和の姿です。だから、天使も来てイエスに仕えるのです。サタンに打ち勝たれたイエスに、天使が来てそのお食事の御用に仕えるのだと言われています。アダムはパラダイスで神様との交わりと言う特権を失いました。イエス様はそれを荒れ野で回復された。イエスを信じる人間の終末的栄光を象徴しているのです。**最後に「荒れ野」においてイエスは何を受け、それによってどのような道を進もうとされたか？** 神の子」としての啓示を受け、同時に『**王の僕**』としての召命を受けられた。

この聖霊による啓示はバプテスマを受ける際の一瞬のものではなく同じ聖霊がイエスを荒れ野に追いやって、そこでイエスは身を以ってその啓示を確認させられた。荒れ野は同じく、イエスにとって啓示の時であった。だからイエスは祈りで何時も『アツバ』お父ちゃんと呼びかけられる。『**わたしの父からすべての事がわたしに引き渡されている**。父のほかに子を知る者はなく、また、子のほかに父を知る者はない。そして、子が示してあげようと望む者のほかに、父を知る者はない』^{【マタイ11:27市川氏私訳】}。これは、子として父から受けている啓示を人々に伝える使命を述べられた。しかも、『**王の僕**』予言を成就する者としての使命をも自覚し、主の僕の道がイザヤ書53章に予言されているように苦難の道であり、多くの人の為に死にいたる道である事を見つめ、その道を受け入れられた。だから十字架の道を行こうとされるイエスをいさめる弟子（ペテロ）の声に、イエスはサタンの誘惑を見られたのである。そして、『**メシア**』と悪霊が言った時も、弟子たちが「あなたは神の子メシアです」と告白した時も「これはわたしの子である。これに聞け」と言う声が、天から聞えた時も、秘密を保つように命令された。預言の成就がなるまで。つまり十字架、復活が起こるまで。

私は今まで、この「マルコによる福音書」のお話をしてきました。そして始めにご紹介したような、諸先生方の著書によっていることを明らかにしましたが、著書全てを写している訳ではなく要約ですので、文章全体をお読みななれば、更に霊的な賜物を豊かにお受けになるに違いないと存じ、殊に私が大きな感動をもった市川喜一師著「マルコ福音書講解」を次に次にご紹介いたします。

市川喜一著 「マルコによる福音書」Ⅰ・Ⅱ巻 定価2500円 送料200円
天旅出版社 電話 075 341 6288)

600・8071 京都市下京区俵屋町206・3 創和会館内 市川喜一師宛
振替口座 01060・5・448

市川喜一師名、または天旅名でひくと、パソコンのホームページに、同師のすべての著書が閲覧できます。新約聖書全部の講解と、「福音の史的展開」です。